

第 275 回(1 月)

「教育展開の重点をこうする」 一人材教育の主眼に関するアンケート調査—分析結果発表

株式会社現代経営技術研究所 経営調査部

(激しい競争下での業績アップに直接応える教育として「マナー突破を図る、発想や方法の刷新教育」を挙げるアンケート回答者が最も多かった (約 36%) ことを念頭に)

第一に、今日のさまざまな問題のもとを突き詰めていくと、思考力の問題に行き着く場合が多い。これは、人が自ら考えようとする前に、始めから知識を次々に覚え込ませるようなことをやって、かえって思考のフタを塞いでしまうような教育に起因している。

また、文化の影響として我々は日本人特有の視点から思考する習慣がある。時にそれが視野の狭さや情報の偏りになって問題を起す。それではグローバル社会では動きが取れない。そこで、普遍的な、むしろあえて外国人的な視点を、思考の場にどんどん導入することが効果を上げる。また、これも文化に起因するが、我々は思考過程でものを曖昧にする傾向がある。それがものごとに深く切り込んでいくことを阻害する。この点を徹底的に突き、分析深度を上げていくことが大事である。これらを意識して指導することで、日本人の思考のもつ弱点をカバーし、思考の明確化を図ることができる。

第二に、絶えず現状から問題をみるくせがついていて、それが壁になっており前に出られなくなっていることが多い。これを破るために、まず到達点から発想する。そこから現状を見る思考態度を身につけて欲しい。そうすれば、将来の姿から現在の問題を発見することができるようになってくる。思考順序を変えさせることだ。

みな忙しい中で現象処理に追われて生きてきた。しかし、今、あらためて現象の奥にある本質は何かを見させる教育が必要になっている。これがパラダイムの転換という今日的な問題の底にあるものだ。

ひと言でいうと知識を教えこむ教育から知識を創造させる教育への転換が必要である。それが人を発展させる。たとえば新しい経営とはどういうものなのか、を考え抜き、俺はこう考えた、というのが彼にとっての知識創造の第一歩である。そういう自分の洞察を獲得して事にあたると、今までとは違ったものがどんどん見えてくる。今まで見過ごしていた問題を発見できるようになる。それらは彼の新しい行動資源としてどんどん拡がり積み上がっていく。激しい環境下での問題障壁突破は、その問題を突破する方法を自分で考え抜かせることから始まるのである。そのための誘導と指導と刺激が望ましい。